



## DICOMO2018 シンポジウム開催報告

### DICOMO2018

2018年7月4日(水)から6日(金)までの3日間、福井県あわら市のあわら温泉「清風荘」にてDICOMO2018シンポジウムを開催した。DICOMOは、マルチメディア、分散、協調とモバイルシンポジウム(Multimedia, Distributed, Cooperative, and Mobile Symposium)の略で、1997年より毎夏、日本各地で開催しており、今年(2018年)で22回目を迎えた。

第1回のワークショップでは、3研究会の共催で、参加者145名であったが、DICOMO2018は、10研究会の共催で、参加者432名、講演268件のシンポジウムとなった。

DICOMO開催場所を決めるための要件は、400名以上が入れる大ホールがあり、かつ、8パラレルセッションが可能であること。また、参加者全員が一堂に会して食事をとれることも要件の1つである。食事はできれば御膳スタイルが良く、温泉であればさらに良い。今年もこの要件を満足させるため、会場を探した結果、福井県あわら温泉となった。あわら温泉は、福井県屈指の温泉街であり、昔から関西の奥座敷として多くの文人墨客に愛されている。過去に第4回、第16回と北陸地方での開催はあったが、福井県での開催は今回が初めてである。

このレポートでは、あわら温泉で開催したDICOMO2018を運営者の視点で振り返る。

### 統一テーマ

世界には今大きな変化の波が押し寄せ、社会はさまざまな課題を抱えている。そして、それらを解決する革新的なイノベーションが求められている。2015年、国連は、世界で最も差し迫った課題を解決していくための17の目標を掲げた「持続可能な開発目標(SDGs)」を発表した。また、2016年には温室効果ガスの排出を長期的に劇的に削減する画期的なパリ協定が発効された。我々のノウハウにより革新的なソリューションを社会に提供し、人々や地球環境に与えるネガティブインパクトを少しでも軽減・緩和するために、SDGsなどの国際的な目

標達成に積極的に貢献していくことは、とても重要なことである。

そこで第22回を迎える今回のDICOMO2018では、ICTの活用によって我々が直面するさまざまな社会問題を解決し、安全・安心・快適に暮らすことができるように「ICTが牽引する持続可能な社会」を統一テーマとし、テーマに沿った発表からなる特別セッションを設けた。

### 特別招待講演

例年、DICOMOでは特別招待講演を企画している。講演者の選定に関し、さまざまな議論を重ねた結果、DICOMO2018では、福井県立大学恐竜学研究所所長の東洋一先生をお招きした。福井県は「恐竜王国」と呼ばれるほど化石発掘が盛んな所である。東先生は、日本の恐竜研究第一人者で、ご自身でフクイサウルスを発掘、全身骨格を復元されたほか、福井県立恐竜博物館の設立に尽力され、また、その館長として恐竜研究の発展に寄与されている。

今回は、「福井県の恐竜時代」というタイトルで、福井産の恐竜(福井ラプトル、フクイサウルス、フクイチタン、コシサウルス、フクイベナートル)の発掘と、恐竜の進化および分類に関する研究成果のお話をいただいた。また、最近では、化石から物理的に取り出すことができない個々の小骨を、工業用CTスキャナ等を用いて3D骨格復元を試み、さらにそのCGモデルを3Dプリンタで出力して複製骨格をも組み上げる等、古生物学とICTとの繋がりについてもお話していただいた。

参加者は、いつもの研究とは異なる分野での最先端研究に触れることができ、一風変わった刺激を受けたであろう(図-1)。

### セッション

DICOMOでの発表は、8つのパラレルセッションで構成される。参加者は、それぞれ興味・関心があるセッション会場に移動し、聴講する。DICOMOでは、発表12分+質疑応答8分と質疑応答の時間を比較的多く取っているのが特徴である。これにより、発表された内容に対



図-1 特別招待講演の様子

して発表者と聴講者との間で活発な議論が行われ、特に若手研究者にとっては、良いアドバイスになったと思う。

また DICOMO2018 では、10 件のデモセッションと 2 件の企業展示を行い、最先端の研究成果や製品のデモを発表した。発表されたデモは、参加者の投票と審査員の採点に基づいて、野口賞という特別な賞が与えられる。今年は、「発話言語に基づく身体モーションの自動生成」と題する NTT のデモが第 1 位に輝いた。

また、2 日目の夜には恒例のナイトテクニカルセッションを開催した。ナイトテクニカルセッションは、昼間の研究発表とは一転し、研究室・大学紹介、取り組みやプロジェクト紹介、お蔵入りネタ、テーマ提案等がカジュアルな雰囲気で開催され、会場を大きく沸かせた。

## 夕食会

DICOMO の特色は、何と言っても 400 人以上の参加者全員が一堂に会する夕食会であろう。巨大な宴会会場に集まって御膳スタイルで食事をする光景は圧倒される。

今年は、ズワイガニを始め、越前おろし蕎麦、焼鯖寿司など、地元福井の名物に舌鼓を打った (図-2)。

## 地元広報

地元報道機関に DICOMO2018 の開催について打診した結果、福井テレビの夕方のニュース番組にて、DICOMO2018 の様子を取り上げられた。また、福井新聞の朝刊にも掲載された。

福井テレビでは、開会式の様子とともに DICOMO2018 の概要が説明され、またデモセッション会場において展示されているデモがいくつか紹介された。

翌朝の福井新聞でも、開会式の写真とともに DICOMO2018 の概要が説明され、また、具体的な研究



図-2 夕食の光景

発表として、スマートフォンによる積雪量観測の取り組み等、北陸に関連した研究成果がいくつか紹介された。

## 表彰

DICOMO では参加者の投票と委員の評価による表彰制度が設けられており、以下の賞が贈られた。

・最優秀論文賞	4 名
・優秀論文賞	24 名
・最優秀プレゼンテーション賞	4 名
・優秀プレゼンテーション賞	26 名
・ヤングリサーチャー賞	25 名
・シニアリサーチャー賞	1 名
・野口賞 (デモンストレーション賞)	4 名
・ベストカンバーサント賞	4 名
・ナイトテクニカルセッション賞	3 名

また、DICOMO の活動にこれまで貢献した 4 名の方に活動功労賞が贈られた。

## 後書 (雨にも負けず……)

今年の開催は、天候には恵まれず、記録的な大雨となった平成 30 年 7 月豪雨 (通称、西日本豪雨) と重なってしまった。

初日は、滞りなく開催することができたが、2 日目になると大雨の影響で金沢ー福井ー米原を結ぶ JR 北陸本線が終日運休となり、さらに北陸自動車道も一部通行止めとなった。福井県は関東方面からも関西方面からもアクセスできない状態となり、陸の孤島となってしまった。そのため、現地に到着できない発表者も現れ、急遽、携帯電話によるリモート発表等にも対応することにした。

また、この雨は、最終日にも影響を与えた。JR 西日本は北陸本線の 7 月 6 日 (開催 3 日目) の終日運休も発表した。それにより参加者約 400 名の帰路が断たれてしまった。

そこで、DICOMO2018 では、会場ホテルから「金沢駅行」と「米原駅行」と「小松空港行」の 3 ルートの臨時バスを合計 10 台手配し、何とか参加者を帰路に着かせることができた。

これほどの豪雨時の開催にもかかわらず、大きな混乱もなく、DICOMO2018 を閉幕できたことは、ひとえに参加者の協力と、開催に携わった多くの方の甚大な功労によるものである。この場を借りて感謝を述べたい。

(坂崎尚生 / (株) 日立製作所)